

「復活の主イエスが現われる」

2016年01月28日

ルカによる福音書 24章 36節～43節。こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。」こう言って、イエスは手と足をお見せになった。彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは「ここに何か食べ物があるか」と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。

ルカ福音書の著者は、復活の主イエスが現われた様を上記のように著している。弟子たちが主イエスは復活し「生きておられる」と話し合っていると、主イエスが現われ、彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と挨拶された。弟子たちが亡霊を見ていると思い、恐れおののいていると、主イエスは「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。」と言って、十字架に釘打ちされた手と足をお見せになった。彼らは喜んだが、不思議で、信じられずにいた。主イエスは「ここに何か食べ物があるか」と求められたので、焼いた魚を一切れ差し出すと、それを取って、彼らの前で食べられた。それを見て、弟子たちは主イエスが復活し、共にいて下さる喜びに満たされた。著者ルカは、復活した主イエスは弟子たちに傷ついた体を見せ、魚を食べ、肉を持って復活した様をリアルに伝えている。

ルカ福音書が書かれる二十数年前、パウロはコリント書（一）を書いている。その15章でキリストの復活について論述している。キリストは復活したというなら、それはどんな体で復活したのかという問いは当然起こる。その問いに対し、パウロは「肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません」と答えている。そして、「蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです」と書いている。卑しい「自然の命の体」として蒔かれたものは朽ちるが、輝かしい、朽ちることのない「霊の体」になって復活すると書いている。

ヨハネ福音書が書かれた100年頃も、復活に関する疑問はあった。ヨハネは、主イエスの「わたしを見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである」という言葉で結論づけている。90年代に書かれたペトロ書（一）1章8節、9節に「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです」と書かれている。

ルカの復活の主イエスの顕現の記述とパウロ、ヨハネ、ペトロのそれは明らかに異なっている。ルカは復活のリアリティーを伝えようとして書いている。主イエスの復活は「霊の体」、目には見えないが、信仰において受け入れる事柄である。その無謀とも思える信仰は虚無から起こされ、希望をもって生きることに向かわせられる喜びである。